

〈第144回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」

音楽評論：飯尾 洋一



ブリテン：ピアノ協奏曲 op.13

初演：1938年8月11日、ロンドン（初稿）／1946年7月2日、チェルトナム（改訂稿）

名技性に富んだ若き日の意欲作

20世紀イギリス最大の作曲家ベンジャミン・ブリテン（1913～1976）の代表作といえど？ 演奏頻度でいえば「青少年のための管弦楽入門」だろう。入門者へのオーケストラ・ガイドとして実用的な価値を持つことから学校教育の場でも親しまれており、また純粋に音楽作品として鑑賞可能な傑作でもある。一方、芸術的な価値や歴史的な意義を考えて選ぶなら、オペラ「ピーター・グライムズ」を挙げる人も多いにちがいない。音楽とドラマが密接に結びついて、閉鎖的な社会から疎外された男の孤独を浮かび上がらせる。きわめて重いテーマを扱っており、音楽的にも苛烈にして凄絶だ。

しかし、本日演奏されるピアノ協奏曲でブリテンが見せる顔は「青少年のための管弦楽入門」とも「ピーター・グライムズ」ともまったく違う。その音楽は目もくらむような名技性と若々しいエネルギーにあふれ、ウィットに富み、スタイリッシュでもあり、ときにはグロテスクでもある。作曲は1938年。作品番号13という数字からも

作曲家プロフィール



ベンジャミン・ブリテン

Benjamin Britten, 1913-1976

20世紀のイギリスを代表する作曲家。ピアニスト、指揮者としても活躍した。第二次世界大戦前後の前衛的な潮流からは一歩距離を置きながら、伝統の延長上に独自の作風を確立することでイギリス音楽界に新たな地平を切り開いた。「ピーター・グライムズ」や「真夏の夜の夢」他のオペラ、世界大戦の悲劇を伝える「戦争レクイエム」、さらには管弦楽曲、室内楽曲、声楽曲の分野に多数の傑作を残している。反戦主義者でもあった。

察せられるように、ブリテンとしてはごく初期の作品だ。同年8月のBBCプロムスにて、作曲者自身のピアノとヘンリー・ウッド指揮BBC交響楽団により初演された。なお、初演時に第3楽章は「レチタティーヴォとアリア」と題されていたが、1945年の改訂により現行の「即興曲」に差し替えられている。

古典組曲を思わせる4楽章構成

このピアノ協奏曲の大きな特徴は、4つの楽章で書かれているという点。多くのピアノ協奏曲は「急—緩—急」の3楽章構成からなる。ところがブリテンは4楽章構成を採用した。見方によっては、この協奏曲を交響曲風の4楽章構成とみなすこともできなくはない。冒頭にアレグロ楽章が置かれ、第2楽章がスケルツォ相当のワルツ、第3楽章が緩徐楽章で、第4楽章が活発なフィナーレ。ベートーヴェン「第九」と同じような、通例とは第2楽章と第3楽章の順序が入れ替わったタイプの楽章構成だ。

しかし楽章の中身を見ると、むしろブリテンの狙いはバロック期の古典組曲の再現にあったように思える。第1楽章はトッカータ。トッカータとはバロック期に書かれた自由で即興的な楽曲を指し、しばしば前奏曲と共通した性格を持つ。第2楽章はワルツ。前奏曲の後に種々の舞曲が続くのが、バッハらの作品に見られる古典舞曲の基本構成。第3楽章は即興曲。即興曲といえばロマン派のキャラクター・ピースだが、この即興曲の中身はパッサカリア。すなわちバロック期に盛んに書かれた低音主題による変奏曲のスタイルが用いられている。終楽章は行進曲。舞曲との距離は近い。つまり、ブリテンのピアノ協奏曲は20世紀の新古典主義的な発想から生まれた作品といってよいだろう。

■第1楽章 トッカータ

冒頭から独奏ピアノがエネルギーでスピード感あふれるパッセージをくりだす。名ピアニストとしても知られたブリテンの意欲が伝わってくるようだ。終盤、独奏ピアノのみによるカデンツァが置かれるが、このカデンツァそのものもトッカータ風、あるいは幻想曲風の趣。

■第2楽章 ワルツ

優雅なワルツかと思いきや、どこかぎくしゃくして歪んだワルツだ。在りし日の栄光を偲ぶかのような、ウィンナワルツへのオマージュ、あるいはパロディというべきか。似たような趣向でラヴェルが「ラ・ヴァルス」を先んじて書いていることを思い出す。

■第3楽章 即興曲

前述のようにパッサカリアのスタイルで書かれている。ゆったりとした瞑想的な主題を独奏ピアノが奏で、これにさまざまな表情を持った変奏が続く。切れ目なく次の楽章へ。

■第4楽章 行進曲

いくぶん諧謔味を含んだ行進曲はマーラーを連想させる。勇ましいというよりは不穏な気配を漂わせた行進が続き、次第に緊迫感を高める。狂躁的な頂点を築いた後、第1楽章トッカータのムードを回想しながら輝かしいコーダで全曲を閉じる。

楽器編成

フルート2 (ピッコロ持替2)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、テナードラム、スネア・ドラム、グロッケンシュピール、タンブリン、鞭、ハープ、弦楽5部



チャイコフスキー：交響曲 第4番 へ短調 op.36

初演：1878年2月10日、サンクトペテルブルク

パトロンに捧げられた傑作交響曲

多くの作曲家は作曲活動のかたわら、演奏家としてもステージに立ったり、あるいは音楽院で教職を務めている。たとえ大作曲家であっても、作曲だけで生計を立てるのは決して容易ではない。しかし、ロシアのピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840~1893)は、思わぬ幸運によって作曲活動に専念することができた。巨万の富を有するパトロンが手を差し伸べてくれたのである。

パトロンの名はナジェージダ・フォン・メック。鉄道王の夫より多額の財産を相続した音楽愛好家である。チャイコフスキーの熱烈な崇拝者であったメックは、まずチャイコフスキーに編曲の仕事を依頼して、経済的に支援する。その後、チャイコフスキーはメックに借金を申し込み、これから書く新作交響曲を献呈したいと提案する。だが、メックはお金を貸すのではなく、無償の援助を決め、以後、長年にわたる支援が続くことになった。おかげでチャイコフスキーは創作活動に打ち込むことが可能になり、交響曲第4番を書きあげて、これをメックに献呈した。

手紙だけで育まれた奇妙な友情

奇妙なことに、ふたりは14年間に1200通以上もの手紙を交わし、特別な友情を育みながらも、決して直接会おうとはしなかった。一度、偶然にも出会ってしまった際は、チャイコフスキーが手紙で不注意を詫言っている。手紙だけの「リモート・パトロン」だったからこそ、結ぶことのできる絆があったのだろう。

■第1楽章 アンダンテ・ソステヌートー モデラート・コン・アニマ

冒頭のホルンによる決然としたファンファーレは、作曲者によれば「運命。幸福の実現を妨げる不吉な力」。続いて弦楽器が苦悩するような主題を奏で、緊迫感あふれる楽想が展開される。

■第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ

オーボエの物悲しい旋律で開始される。中間部分で一筋の光が差し込むが、ふたたび冒頭主題が帰り、打ちひしがれたようなムードが支配する。

■第3楽章 スケルツォ：ピッツィカート・オスティナートー アレグロ

弦楽器によるピッツィカート(弦をはじく奏法)が大活躍。中間部はひなびた農民舞曲風。

■第4楽章 フィナーレ：アレグロ・コン・フォーコ

シンバルの一撃とともに華々しく開始され、民謡由来の主題を交えながら熱狂的なフィナーレを築く。終盤には第1楽章の「運命」のモチーフが帰ってくるが、最後は歓喜とともに曲を閉じる。

楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部

作曲家プロフィール

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Pyotr Il'yich Tchaikovsky, 1840-1893



ロシア最大の作曲家。民俗的要素をとりいれるなどロシア文化に根付いた音楽を書きながらも、同国の国民楽派とは距離を置いて西欧流の創作スタイルを身につけた。流麗で抒情的なメロディを作り出す才能をもとに、交響曲や協奏曲、バレエ音楽、オペラなどの分野で傑作を残している。西欧でもスタンダードとみなされる多数の作品を生み出したという点で、ロシアが生んだ最初の世界的作曲家といえる。モーツァルトを敬愛した。